抽象的心理學と具體的心理學と

野上俊夫

心理學は諸種の科學の中で最も遲く哲學から獨立した爲めに、今日に於いても尙ほ完全な經驗科學としての體貌を具へたといふには種々の點に於いて不完全な所がある。其の最も著しい一つの點は、心理學者といへば先づ第一に自分の心理學の體系といふものを作らぬばならぬといふやうな考へが可なり强く人々に考へられて居ることであらう。

爾他の科學では此の點が大分ちがふやうに思はれる。例へば物理學者は、熱ならば熱、光ならば光といふ一群の現象をとつて、之れを主として研究の對象とし、而かも其の中の更に〳〵細かい一つの部分に向つて研究の努力を集中して居る。而して物理學の體系といふものを作ることは、勿論出來ればそれ程結構な事はあるまいが、併し必ずしもそれを物理學者の第一の仕事とはして居ないやうである。光といふ現象の中に何々といふ特殊な部分を深く研究する事が、物理學者の第一の任務で、物理學體系、若しくは物理學概論といふやうなものを作ることは、いはゞどうでもよい事になつて居るやうである。

心理學はこれとは大分異つて居るやうに思はれる。勿論いろ〳〵な細かい研究はあるけれども、多くの心理學者は、比較的早く自己の心理學の體系若しくは概論を組立てることをつとめるやうに見える。恰かも哲學者が自己の哲學の體系を作る

ことを最も大切なるつとめとして一心に努力するやうに。

その結果として、多くの心理學の「體系」若しくは「概論」なるものが、比較的に抽象的なものとなり「骨」のみあつて「肉」や「血」の無いものになり、「冷く」て「溫か味」のないものになり易い。或は知的方面に於いては叙述は比較的に委しく、系統も整然として居るが、感情若しくは本能の方面に於いては叙述は極めて貧弱であつて、たゞ乾燥無味なる骸骨をならべたる感がある。

ヴントの心理學は此の方面に於ける最も代表的なるものであらう。無慮三千頁に亙る（こゝは勿論彼れの民族心理學の事は全然省く）「生理的心理學」の叙述は、いろ〳〵な諸種の科學の研究の結果をとり入れ、又一方世界に散在する自己の弟子たちの業績を編み入れて、堂々たる心理學の體系の大建築を作つて居るが、其の全體の叙述は殆ど何

かの哲學の體系を見るが如く、知的方面の作用の叙述に詳しいけれども、人間精神の根原たる感情や本能の方面に於いては其の記述極めて貧弱で形式的で興味索然として居る。感情を分析して三方向說を唱へ、それと複雜なる感情乃至激情（Affekte）との關係、さらにそれと意志活動との聯絡如何といふやうな系統的な方面の事は、記述が極めて整然として居つて、寧ろ强ひて型にはめたといふ方の批評が多い程であるが、然らば實際に於いて怒りや悲みや喜びやが如何なる場合に如何なる風にあらはれて來るか、それが人間生活の上に如何なる影響を及ぼすかといふやうな點は殆ど何も記載されて居らぬ。或は人生の最大の本能と考へられて居る食慾や恐怖や色慾などの事についても殆ど何等の記述も無い。これが果して人の心を研究した心理學の書物といふことが出來るかを疑ひ度いぐらゐである。

之れから見ると佛蘭西の心理學は、大體から云つて、餘程この抽象的な體系を作るといふことや知的方面の現象にのみ詳し過ぎるといふ弊害から免れて居るやうである。ヴントに匹敵すべきリボーや、新心理學の驍將なるビネーの心理學を見ても、主として感情若しくは本能といふ方面に重きをおき、而かもその著書は、感情とか兒童の精神發達とかいふ細かい方面に深くはいつて居て、「體系」や「概論」は一冊も書いて居らぬ。尤もビネーは晩年に書かうと考へたさうであるけれども、其の志を果さずに死んだ。今少しひろく佛國の心理學界を見渡しても、教科書風のものを除くの外は、「體系」や「概論」らしいものは殆ど見當らない。勿論これは一方からいへば心理學者の數が獨逸に比して少く、又研究そのものも比較的に少いといふことにも由るかも知れないが、併しやはり佛國心理學者の態度が眞に科學的であるといふことも與つて力あると思はれる。

十九世紀の末から二十世紀の始めにかけて、心理學は漸く此の抽象的、知的、若しくは「體系的」なる風を脱して、具體的、感情的本能的若しくは「個々研究的」なる方面に向はんとしつゝあるやうに思はれる。米國のジェームスやホールを先輩とし、ソルンダイクやワットソンやヤーキースを中堅とせる「生物學的」心理學は、獨逸に起つた「生理學的」心理學に對して、着々地歩を占め、その「具體的」人性の研究は、佛國の兒童研究的及び精神物理的研究の上に出來た心理學と呼應して、新しい心理學の向ふべき方向を指示して居るやうに思はれる。其の影響は夙に獨逸にも及んで、現在の獨逸心理學の中堅たる人々たとへばモイマン、シュターン、クリューゲル等の人々を動かし、此等の人々はいづれも生物學的若しくは兒童學的方面の研究に沒頭して、「心理學體系」を書くことなどは餘り

重く考へて居らぬやうに見える。墺太利のフロイドを中心として、同じく墺のアドラーや瑞西のユングや、米國のジョーンスなどの人々によつて率ゐられて居る精神分析學も亦、從來の形式的若しくは知的な「淺い」心理學に對して所謂「深い」心理學を樹立せんとし、其の所說に往々極端淺薄な所があり、又彼等の仲間同志に可なりの意見の相違があるけれども、在來の「體系的」な心理學に對して叛旗を飜へし、これに一脈清新の氣を注入せんとするに於いてはいづれも其の軌を一にして居る。

かくして二十世紀の心理學は、次第に體系的より個々研究的に、知的より情的本能的に、「淺き」より「深き」に抽象的より具體的に進み行きつゝある。

彙報

哲學會春期公開講演會

五月二十日(土)午後一時半から法學部第一教室で開催左の講演を行つた。

一、實驗的內省に就いて　文學士　岩井勝二郎君

一、結婚論　文學博士　高瀨武次郎君

講演終了後學生集會場で會員の晩餐會を開いた。

金曜會例會

四月二十一日(金)午後七時より學生集會場で次の論題について盛に談論した。出席者、久松、岩井、伊藤、篠崎、務臺、白井、三木、大脇、加川、伊東、其他學生數名

個性の問題　哲學研究一月號)　三木　清君

五月十九日午後七時より同じく學生集會場で例會を開いた、論題次の如し

カント哲學に於ける「實踐的」の意義(哲學研究四月號)　務臺　理作君

哲學會例會

四月二十五日(火)此度獨逸に留學される三木清君の送別を兼ねて次の講演があつた。